

Interpreter Workshop

第33号

庭屋の森パークレゾナー

ようこそ！ 府民の森パークレンジャーへ。

新しく仲間に入られたレンジャーのみなさん、そして継続されたレンジャーのみなさんも、新しい年度を迎えて、新たに今シーズンのさまざまな活動を心に描いておられることと思います。

パークレンジャー活動も14年目を迎え、府民の森の姿も少しずつ変化し、訪れる府民のニーズもまた、変わってきているのかなと考えたりしています。

この数年、それぞれの活動拠点を定めることで、それぞれの園地の良さを取り入れたレンジャー活動ができるようになってきているように感じますが、反面、他の園地との情報交換や、レンジャー同士の交流をうまく活性化するのは難しいなあと、思っています。

このInterpreter Workshop (略してIPWS) はそんな普段あまり顔を合わせることができないレンジャーの会報誌のようなもので、かつて創設期の先輩レンジャーが発行していたものが一時、中断していたものを3年前から復活させたものです。

年4回の季刊を目標にしていたのですが、残念ながら声かけ係り(?)の怠慢で、18年度は2回しか発行できませんでした。

特に内容に決まりごとや制限はありません。あくまでもレンジャー同士の交流や情報交換を目的としたものですので、気軽に書いて気軽に読んで、レンジャー組織の潤滑油になれば…と思っています。

行きがかり上、'声かけ係り'を引き受けている私ですが、お手伝いいただける方、ご意見いただける方、どしどしお声をかけてください。また、どちらもちょっと…という方は、原稿の依頼があったときは快く寄稿下さるようお願いいたします。



ところで私自身、このレンジャー活動とかがわっていることで、多くの仲間から影響をうけ、やさしい気持ちになり、園地の風や空気に触れることで、日ごろのストレスがすーっと溶けていくような感覚をいつも覚えています。

もちろん、レンジャー活動の目的は、府民の森を守りながら多くの人に利用してもらうお手伝いをする事なのだと思いますが、その活動を一緒にすすめていくたくさんの仲間を持てることは、とても幸せなことだと感じます。大汗をかいて、へとへとになってキャンプの準備をしたり、洪水のような大雨の中、ずぶぬれで登山したり、真夜中のキャンプ場で人生について語ったり…道端の雑草に咲く花に座り込んで見入ってしまう自分にふと気づいて笑ってしまうのも、レンジャー仲間のおかげだなあと感じます。

本当はもっと動植物のこと、環境のことを勉強して、園地の活動に還元していかなければならないのですが、やっぱりキャンプが好きな私は、「森の中で暮らす…」というコンセプトをベースに何かできることはないかと考えています。つまり森とともにある'衣食住'。たとえば壘で編んだ籠を持って森に入り、食材を調達し、拾った木切れや間伐した樹を燃料に調理し、一緒に採集した草木で衣服を染めたり、乾燥させてお茶を作る。夜は満天の星を見ながら落ち葉のベッドで眠る。

もちろん園地内でできないこともたくさんあるので、少しでも、「森の中で暮らす」体験を取り入れることができればいいなあと考えたりしています。(実際は忙しさにまかせて例会にも行けないことが多いのですが…)

もう、くろんど園地では水芭蕉が咲いています。それぞれの季節は一年に一度しか巡ってきません。何とかがんばって今年も季節を感じ、森で暮らすために、府民の森へ出かけましょう！

新レンジャーに中部班の魅力をご紹介

第10期 タクさん

新規にレンジャーになられた皆さんおめでとうございます。心から歓迎いたします。

中部班の紹介を一方向的にさせていただきます。

色々有る、パークレンジャー班の中で4つの園地を持つのは、中部班だけです。中部班の魅力はおおまかに言って6つあります。(これは私の独断ですが)

東大阪市から八尾市にまたがる生駒山系には、くさか・ぬかた・なるかわ・みずのみの四つの府民の森園地と車椅子の方でも登山が楽しめるらくらく登山道があります

特に、ぼくらの広場から大阪平野を眺めるパノラマ風景は絶対に見逃せません。天気の良い日には明石海峡大橋もくっきりと見えます。これが第一の魅力です。

6月に花開く2万株のあじさい園の華やかさも多くの人に喜ばれています。梅雨の晴れ間の輝きは心が癒されます。第二の魅力です。

第三の魅力は森のレストハウス周辺の自然展示樹木です。回遊しながら散策して四季おりおりの色々な樹木が観察できます。

第四は車椅子でも行けるらくらく登山道です。毎年、車椅子の方達のハイキングイベントが行われてお年寄りにも喜ばれています。

第五は毎年恒例の年末に行われている新年のしめ飾り作りで、とても人気で年々参加者が増えています。

最後はとても個性豊かな楽しい仲間です。自分が楽しめなければ人も楽しませられないと、色々工夫をしながら活動しています。自分も知識を得て成長し、また人に伝えていく、そんな良いこと今の時代、なかなか無いですよ。

こんな中部班と一緒に活動しませんか？

プロジェクト パークレンジャー入門講座

12期 下釜 恭道

えらいことになってしまった

のせられやすい性格で、ついついパークレンジャー入門講座のヘッドを引き受けてしまった

パークレンジャー2年目、森林インストラクターも今年取得したばかり

そんなボクで大丈夫だろうか？

でも考えてみると、今回入門講座プロジェクトに集まったスタッフは、自分のアイデアをぶつけて意見を聞ける人あり、現場で困った時にアドバイスをしてくれる人あり、頼りがいがあるスタッフばかりでこれは逆にチャンスかもしれない 腹をすえて取り組むことに決める

まず、伝えたい思いはなんだろう？

それは、パークレンジャーの活動をよく理解してもらい、共に活動する仲間になってほしい、ということに尽きる

だから今回のコンセプトは、「身近な自然でも、専門知識がなくても、自然のイベントはできる！」そんな可能性を感じる入門講座、と決める

次にプログラムの内容だが、Mさんのプロジェクト・ワイルドの講習を受けた時の経験から「実際にイベントをやってみる方が後に残るのでは？」とのアドバイスにピン！ときた

そこで今回の企画はもう一歩進めて、参加者にイベントを企画してもらい、実際に園地で実践 & 体験してもらおうという体験的なプログラムにした

他にも「イベント企画の流れ」をプログラムに組み入れたい気持ちもあったが、2日間では時間が足りないので捨てた
こうして公社での何度かの打合せ、3度の案修正、現地下見を経て当日を迎えた

(1日目)

会場は大阪歴史博物館の会議室 27名の参加者が集まっている

公社あいさつ、スケジュールの紹介と目的の共有化、スタッフの紹介に引き続き、こんなプログラムで進んでいった

<アイスブレイキング>

参加者は当然初めて顔を会わず人ばかり

そこで必要となる緊張をほぐす導入部を硬い氷を壊すという意味で「アイスブレイキング」と呼んでいる

やはりここはボスの出番だろう

「スマイルDEシェイクハンド」と「1分間自己紹介」という2つのゲームで見事に参加者の緊張を解いてくれる

<園地紹介>

各班の代表者から園地での活動をチラシとプロジェクトの写真を使って紹介してもらう

ここではちやや班の紹介をお願いした荒ちゃんがキャラを發揮して一番人気 さすが名物レンジャー！

あと、ボクから「インタープリテーション」について、今回のコンセプトに絡ませて説明させてもらった

(ここで題材に使ったのは「エビフライ」とレイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」)

「センス・オブ・ワンダー」は自然に触れる意義と方法についてさりと語った名著 1日で読める量なので読んでない方にはぜひオススメ)

<イベント計画作り>

「思いをカタチにする」と題して、グループに分かれて翌日に実践するイベント計画作り

いきなり「思い」を出せ、というのも無理な話なので、各人のこれまでの自然との関わりを折れ線グラフで表現するシートを使ってネタ出ししてもらう

ここは今回の企画で挑戦の部分

参加者にいきなりイベントをつくってもらう、というのは初めての試みであり、企画者であるボク自身、実は内心「まとまるかな？」と不安だった

そのため事前にレンジャーで3つのプログラムを用意していたほど

でも結果的にそんな心配は不要だった

レンジャーは、参加者の自主性に任せて見守る程度とし、参加者が話し合う中で自然とイベント案がまとまっていた
できあがったのは、なかなかバラエティに富んだ6つのイベント その内容は…これは翌日のお楽しみだ

(2日目)

天気はあいにくの雨 目指す生駒山上はすっぽりとガスに覆われている

それでもこの天気の中、昨日の参加者のほとんどが集まってくれた

場所は、なるかわ園地「森のレストハウス」

参加者同士が実施者 & 体験者になってイベントが始まった

〈イベント実践 & 体験〉

その内容を以下紹介すると…

- ・「これ何の木？」 葉や実を採集して短冊をつくるネイチャークラフト
- ・「春を採集してみよう！」 生き物、植物をよーく観察し、拡大してスケッチする
- ・「さらさわ動物園」 目隠ししてたくさんの種類の葉っぱを集めた方が勝ち！というゲーム
- ・「春を感じよう！」 各自の“春”を感じる対象をスケッチする
- ・「私の歳いくつ？」 チーム対抗で直段を記入したどんぐりを探して合計金額を競うゲーム
- ・「何の木？何の葉？」 封筒に落ち葉を入れて25グラムに一番近い人が勝ち！というゲーム

これがみんな今回の参加者が考案したイベントというから驚きだ

創造力をかきたてるスケッチ・ネイチャークラフトあり、身体を動かすゲームあり、そして全てに観察の要素も入っている
今回のコンセプト、「身近な自然で、専門知識は少なくとも、インタープリテーションできる」ことを体現してもらったか
のようなイベントばかり

それにイベントの雰囲気がとてもよかった

あちらで笑いあり、こちらで「ふ～ん」と感心の声が上がったり、ガスと雨の中をものともせず、とてもポジティブな空気に
溢れていた

〈ふりかえり〉

イベント後、グループごとに「ふりかえり」と「わかちあい」

このふりかえりでは、単なる「反省会」にせず、イベントの中で自分が感じたことや発見したこと、いわゆる「気づき」と
して得たことを参加者でわかちあう時間にしたかった

けれど、ここは消化不良 時間不足もある(ひとりですべて「ふりかえりシート」を書く時間を合わせて20分間)

ここは今回少し勉強した「ワークショップ」や「体験学習法」とあわせてボク自身の大きな課題として残った

〈園地ハイキング〉

最後は、森のレストハウスから駅までのハイキング

晴れならば大阪平野を見下ろしながらのはずだったが、濡れずに下りれたのがせめてもの幸い

1時間半とちょっと長いハイキングになり参加者にとっては大変だったろうが、最後に駅で見たみなさんはとてもいい表
情をしていた

最終的に20名を超す方が新規レンジャーとして申し込んでくれたという結果がそれを物語ってくれていると思う

…と、企画意図も合わせて記すことが今後他の人が企画する際に役に立つかもしれないと思い、報告書代わりに
書いてみた

今回は企画段階から多くのスタッフが「なにがベストか」前向きに意見をぶつけあってつくったイベントで、とてもいい経
験をさせてもらった みんなでつくった入門講座という充実感を感じます

新規レンジャーはみな何かやってくれそうな人ばかり 今年の活動が楽しみです！

(おまけ) 4月22日(土)にむろいけ班の歓迎会を開きます 「一度、むろいけ園地を見てみたいな」という新規
レンジャー、久しぶりにむろいけを歩いてみたいレンジャー大歓迎！！園地ガイドウォークやネイチ
ャーゲームなどの企画を用意してお待ちしています(参加の申込みは、下釜か公社日下さんまで)

「人間へのはるかな旅」

森本哲郎著

「やわらかな草におおわれた緑の丘があつて、そこに上ると、『現代』という時代がずっと一目で見渡せる、そんな丘に立ったら、さぞかし、いい気持ちであろう」という書き出しで始まるこの小説の「現代」とは、1970年のこと。もう35年も前に書かれた本です。

「現代の問題とは何か、またその問題の解決方法は、」に思いを馳せる主人公が、イラクのバグダットで耳にした不思議な老人。貧民街に住み住人たちからシャイフ（長老）と呼ばれているカリズマ老人にその回答を求めて、ロンドン、カサブランカ、マラケシュへと旅をしていく知的ポウケン物語です。

物語の舞台となるの1970年とはどのような年であったのか？高度成長を支えてきた科学技術の驚異的ともいえる発達、又モーレツ主義、エコノミックアニマルといわれた行動基準に綻びが出始め、社会の問題として「公害」や人の心の問題としての「断絶」といった言葉が新聞をにぎわした時期である。

カリズマ老人は、この年の最大の問題を「秩序なき価値」だと言う。「何が大切で、何がくだらないかという、物事に対する判断基準がバラバラになって秩序をなくしてしまう。」今では、「価値の多様化」などという言葉であたりまえの世情として片付けられてしまっているが、本当にそのままでよいのだろうか？根っ子の問題をもっと考える必要は無いのか？

主人公は、この「秩序なき価値」を問題にするカリズマ老人に「現代の問題の解答」得ようと手紙を出すことにする。苦勞して住所を調べ、カサブランカの Hotel De Noailles に短い手紙を出すのだが、その返事は荀子の言葉を借りて「問いの悪いものには答えるな。」とそっけない内容。仕方なく「現代の問題」について、自分なりに考えカリズマ老人と手紙を交わすことになる。手紙の内容をまとめると、

（情報）は、無限に増えつづける。情報化社会の脱き口は、「外部の信号が人間の内容で（情報）として意識されることによって成立することを認識すること。」。問題は、（情報）にあるのではなく、情報を成立させる（人間）の側にある。

（能率）への盲目的忠誠心が、日本をかくも短時日のうちに発展させた原動力。しかし、（能率）というのは、目的概念ではなく、手段である。「もうけた3分で、いったい何をすべきなのか？」

（知識）は、急激に増え、膨大な量になってしまった。そして、PFドラッカーが「断絶の時代」野中で書いているように多くの（知識）は、不変の価値を約束されたものから更新の必要なものに変質してしまった。

となるのだが、こうしてみると35年経った今も何も変わっておらず、又本質は解決さ

れていないように思います。

主人公は、こうして「現代の問題」に答えを出そうとするのだが、納得できる解答は、何一つ見出せない。マラケシュにいるはずの老人に直接会いに行くことにする。

パリ、リスボン、カサブランカを經由して、ついにマラケシュにあるハッサン二世の離宮でカリズマ老人に会うことが出来る。回廊の先にあるプールサイドの大理石のイスに腰をおろし、夕焼けで真っ赤に染まった空とプールの水面を見ながら老人の半紙に耳を傾ける。

「問題は、科学的思考で全てをおしまいにしてしまおうとする科学的思考に冒された現代人の魂です。科学的思考は、(事実)の因果関係で説明のつかないことには口をつぐみません。即ち、(事実)と次元を異にする(価値)の領域は放置されてしまうでしょう。ゲーテが感じ取っていた世界苦をノイローゼと言って片付けてはなりません。それは、(事実)の説明になっても世界苦の意味の解説になりはしないのではないのでしょうか。事実は解明されるべきであります。解明された事実に意味付けするのは(事実)の因果関係とは次元を異にする、(価値)因果律です。そして、(事実)の因果律を探求するのが(知識)ならば(価値)の因果律を探求するのは、(知恵)です。哲学者ヴィトゲンシュタインは、(事実)の総和が(世界)だと考え(事実)のハシゴに登りつめていきましたが、最後に絶望してしまいます。(事実)の世界が、(価値)の世界に通じていないことに気付いたからです。」

そして、最後にカリズマ老人は、現代の問題の解答として、主人公に言います。「現代問題集に答えよと言うならば、小生の解答は、『知恵のハシゴに登れ』と言うことです。どのようにして?どこまで?それは、一人一人にまかされています。」

この小説の作者 森本哲郎 (ニュースキャスター森本毅郎のお兄さんで、本人も旅行番組のキャスターとしてTVに出演していたことがあります。)の意図するところをどれだけ伝えることが出来たか心もとないのですが、おもしろくて、ためになる知的冒険推理小説であることは確かです。皆さんも機会があれば一読してみたいかがでしょうか

中部園地班

伊藤孝夫

新規レンジャーの皆さん、はじめまして。

私はレンジャーになってまだ2年目ですが、たった1年間の活動でもいろいろと楽しませてもらえました。

空気のおいしい森の中の活動、樹々や野鳥達とのふれあい、老若男女様々なレンジャーや参加者の人達との交流等など。

新規レンジャーの講習会でも、様々な人達から様々なお話しを聞かせていただきました。パークレンジャーの活動に対する期待には大きなものがあるように思えました。イベントや工作だけでなく、施設の補修、清掃活動、森林整備等いろいろなことをしたいと話されていました。ぜひ、一緒に活動しましょう。

でも、自然が相手の活動ですからあせりは禁物。ゆっくりと長い眼でじんわりといきましょう。ちょうど、森に降った雨が土にしみ込み、長い時間をかけて再び泉となって湧き出るように。

中部園地で待っています。

稲山耕史

32名と沢山の新人パークレンジャーの方がお入り頂け、仲間が増えて大変嬉しいです。まずは時間の許す限り、各園地の活動に遠慮なくご参加頂きたいです。園地により活動に特徴がありますので、色々楽しめます。私が今まで活動に参加して特に楽しかったのは、キャンプです。小学生の子供達にブラさんブラさんと男の子も女の子も私の腕を取りにくるのです。私が疲れていると思えば腕を引っ張ったり、後ろから押したりしてくれます。素直で優しく本当に癒されます。もちろん工作も劣らず楽しいですよ。家族での参加となりますので、子供さんができない所を両親とか両祖父母とかがカバーしてくれます。そんな時、私の父さん母さんは、こんな事もできるんだとの尊敬のまなざしで見えています。親子関係を良くし且つ、自然素材の工作で、自然物との触れ合い、物作り、ナイフ等の工具を使い、危険の体験ができる等、良い点が盛り沢山にあります。自然解説と工作に興味のある方は是非、むろいけ班の活動にご参加下さい。

12期パークレンジャー ブラさんこと 宗(そう)誠一

こ う さ く 好 き

子供の頃の雑誌の付録作りから始まって、中学校の美術や技術の授業、プラモデル作り、パークレンジャーになってからは自然素材を使ったネイチャークラフトなどなど、今も子供の頃も工作が好きな私です。

今は、素朴な素材でいっけん簡単そうに作れそうなネイチャークラフトを作るのはまっています。この『いっけん』というのがミソで、いかにも難しそうなのは次元が違いすぎてお客さんの反応が悪いし、私もよう作りませんが、「素朴・かわいい・簡単そう」だと、お客さんの反応がいいですね。でも、あくまでも『いっけん簡単そう』なだけで、作る側の私にとっては、案の段階で、あーでもない、こーでもないと思いを絞り～の、次はあれやこれやと何度も試しながら、時間もかけ～ので、えらい手間をかけて作っています。

材料なんかも、特に小枝が好きです。細いものなら森の中や家の近所の公園でも落ちていたり、そんな身近で手に入りやすい小枝が一工夫で素敵なものに生まれ変わる魅力がいいんです。



(小枝で作った「森の音楽隊」)

以前に、森の工作館の初代館長が「創造と創意工夫」という言葉をよく言われていました。創意、工夫しながら、試行錯誤し、苦心して作品を完成させる努力が工作の楽しいところだと。そんな教えを受けた私は、自分の趣味ではもちろんのこと、工作のネイチャーイベントをする時も、試作を繰り返して自己満足 120%の見本を携えて意気揚々と本番当日をむかえます。

館長の教えを受けて、「何も考えずに簡単にできる工作なんて楽しくない!」と思ってしまう私にとっては、今の時代、ご時世風の「簡単に楽しくできたらそれだけでいいんじゃないの!」という考えには、居場所がなくて寂しい限りですねえ・・・。

かなざき ひろたか

次なる活動につなげるために皆で考えてみませんか？
テーマ 生命の不思議、尊さ(大切さ)を感じよう

パークレンジャー12期 山崎智昭

昨今、生命が軽視される事件、生命が危機に見舞われる災害(自然、戦災、人災)が多発するなか人々に生命を実感し、その尊さを知り、日々の糧にしてほしい。・・・パークレンジャー、ふれあい隊の方々の今後の活動の何かの参考になればと思います。

- 言葉で、体験で生命を感じてもらおう。
- レンジャー各々が持つ知識、経験、体験をもとに自分の持ち味でインタープリテーション(自然解説)をする。
- 各レンジャーの好きなこと(興味、関心)、得意をベースに参加者と語り合う。
- インタープリテーションは、たとえたどどしいガイドであっても参加者に強く伝えるものが一つでもあればその役目を十分に果たしているのでは。「うまくやるのではなく、気持ちを込めて懸命に取り組む」(自らも楽しみながら)のが大事なのではないのでしょうか？
- 一つの題材、話のきっかけから話題の枝葉を拡げ展開させていく。

(例)アリを見つけた。→アリの仲間には葉っぱを利用してキノコを栽培し、自らの食糧にする知恵のあるものもいます。→小さな生き物ですが人間と同じく新しい生と死を繰り返しながら生命のリレーをつなぎ、地球の厳しい環境の変化に適応しながら何万年も生き続けている点で偉大な存在だといえます。→また、虫のなかには農業や園芸、日常生活で“害虫”と呼ばれる種もありますが、あらゆる生き物には何らかの役割があり、無意味に存在しているものはありません。人間の都合だけで考えるのではなく、敵としてではなく、地球のバランスを保つために役割を持って生きている存在だと考えればそのような種とも共存できるのではないのでしょうか。→

・・・

思いつくまま、思い込みのままに書かせてもらいました。皆さんのご意見、ご指摘、を聞かせていただければ幸いです。

「新レングジャーのみなさんへ」

先日の入門講座2日間ご苦労様でした。
4月より活動される事を祈念致しております。
まずはレングジャー間での交流を楽しんでほしい!!
それには自分で色々な行事予定を検討され
積極的に参加をされることをお勧めします。
健康を第一とし、自分の予定を考え、各園地
へ出かけ楽しんでほしいとはお祈りしております!!
その中で自分に合う園地と班を決められるのは

上記は自身の事を思い返しての事です。現在は
自然観察、キャンプ、ガイドウォーク等の
経験が積み重なると研修をはじめ客の人との交流
をいふまたよと、今日はありがとうの言葉を
かけられ自分も楽しんで終わると最良の一日也。
又特技名々持つ仲間との自主企画・研究も
自分の向上に役立っております。この様な事が
自己研鑽も行はえと探せぬ。是非皆さんにも
参加して一語に活動される望んでおります。

FN - 「南北」

PR 12期 南出 一男

最近しみじみ思うこと

北部班 奥田浩司（くまさん）

仕事の関係でフィンランドに3年にわたり夏期の間だけ駐在していたことがあります。今でこそ政治、経済、科学、教育、IT、都市計画、産業デザイン、スポーツなど多くの分野で世界の優等生国家となり、日本からムーミンとサンタクロースとオーロラと目当ての観光客だけでなく、たくさんのビジネスマンやデザイナー、教育関係者が訪れるようになりましたが、私が駐在していた13、4年くらい前はまだソ連崩壊直後の混乱期で、制空権の関係などもあってフィンランド航空の定期直行便がとべなかった頃で、いつ墜落してもおかしくないようなおんぼろアエロフロートで成田からモスクワ経由でいくか、（そのためにビザ取得が必要で、ビジネス関係者以外はまずこのルートでの入国は無理でした。ただサハリン行き定期便が出るなど、ロシアへの入国がそれほど難しくなくなっていた当時、ナホトカ行きの船、シベリア鉄道、バルト海を渡る船で北欧をめざす旅人は結構いたようですが。）高いお金を出して、長時間をかけて（若い人は知らないでしょうが、昔はアラスカカインドを一旦経由しないと、空路からは欧州へ辿りつけなかったのです。）ルフトハンザやブリティッシュエアウェイズでそれぞれの国へ一度飛んでからトランジットするしかなかったのです。（私の駐任終了後、1994年関西空港の開港でフィンランド航空の直行便がとぶようになり、大阪にも領事館）ができて、日本とフィンランドの交流が一気に深まりました。）日本人にとっては、せいぜいスキーのジャンプ競技のマッチ・ニッカネンやバリダカールラーのアリ・パタネンが有名だったくらいで、「サウナ」がフィンランド語だということもほとんど知られておらず、ほとんどの人に聞いてもそれがどこにあるかも知られていないようなマイナーな国でした。（東西冷戦が続いていたその数年前に当時の某首相が「日本のフィンランド化」という政治的発言をして有名になりましたが）同じ北欧の、ボルボやアンデルセンで有名だったスウェーデンやデンマークに比べても知名度は大きく劣り、ヘルシンキなどの都市部でもエスニックコミュニティ以外では東洋人を見かけることはほとんどなく（時々見かける東洋人の多くはベトナム難民でした）、ましてや、ノキアの携帯電話（世界で初めて携帯電話をつくったことで有名なノキアは元々森林作業用の長靴とワイヤーケーブルを製造していたメーカーだったそうです）もキシリトール甘味料もマリメッコのテキスタイルもアラビアの食器もイッターラのガラス製品もよほどの北欧通でない限り誰も知らなかったのはもちろん（渡欧前に少し勉強するまでは、当然私も知りませんでした。）、まだEU加盟国ではなく、信じられないことに失業率25%という仕事を見つけることもできないような国だったのです。

私自身、この国で私たち日本人には信じられないような異文化体験もしましたし、いいことばかりしかなかったとは決して言えません。初めの頃は、何もわからず使いつわりの仕事ばかりしていた私には細かいことに厳しい社内外の日本人関係者に気がつかうことも多くて、何事にもものんびりしているわりには、時間が来るとずっと引き上げていくフィンランド人にイライラすることも度々でした。またあまりタチのよくない人が一定割合いるのも、世界共通です。当時は政治も経済もガタガタになっていたこともあって（今の日本と似ている？）、国民にも余裕がなかったのか、正直言って東洋人差別を感じたこともありました（私がベトナム人や中国人ではなく、日本人とわかると手のひらを返したような態度をとった人もいました）。またよく云われているように、高福祉にあぐらをかいて働こうとしない人が少なからずいたことも事実だと思いますし、「フィンランド人は嫉妬深く、陰湿な性格の人が多いし、この国は世界有数の自殺大国なんだよ」という話もききました。またヘルシンキ市内の公園でもリスやハリネズミやノウサギを普通に見かけるほど自然豊かな反面、意外と街中には落書きも多かった印象があります。しかしこの国の人たちは自己主張の強い他のヨーロッパの国の人たちと比べ、とてもシャイな人が多く、体格的にはタテヨコともに立派な人が多いに

もかわらず、同じようにブロンドヘア・ブルーアイズ・透きとおるような白い肌をもったスカンジナビア系（スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、アイスランド、フィンランドとこの4国は同じく北欧5カ国と称されますが、民族も言語体系も全く異なります。）の人に比べると丸顔で鼻も低く、なんとなく優しい顔つきをした人が多く、また言葉の響きが何となく日本語的（関係ないけどミカ、アキ、ヨウコ、ユカそれにエロというのは男性の名前。ヘナ、ヘタ、イナリ、エンマ、ミイラは女性の名前なんです！）で、接していても威圧感が感じられないのです。また少なくとも私が直接出会った人たちは、約束はきちんと守るし、相手の異なった文化や考え方を尊重するという態度も他の欧米諸国には見られない新鮮さを感じたことを覚えていて、国際ビジネスではつきものの文化や習慣の違いによるトラブルも少なかった。欧米といえば、まずアメリカだった10数年前に比べ、今私たちの国でも自己主張一辺倒で相手を言い負かすことに価値を求めるアメリカ的な考え方に、少し違和感を感じる人が学生や主婦だけでなく、ビジネスの世界にいる人にも多くなってきています。（日本のマスコミは何故か報じませんが、日本人や欧州人と同様に、今、目に見える単純な価値観だけで判断された勝ち組と負け組の格差社会が究極の形で進む自分の国に疑問をいただいているアメリカ人は少なくありません。）協調と共育の精神、そして自然との共存。もともとは日本人が大切にしてきたことが、アメリカ一辺倒の日本で失われつつあり、そして遠く離れた長年ロシアとスウェーデンという2つの国に支配され続けてきた歴史を持つ、つい最近まで不景気と高失業に悩まされてきた北欧の国で育まれている現実があります。

私たちの国では財政が苦しくなった自治体までがその役割を放棄し、カネのかからないボランティア主体のNPOへ丸投げし、なかなか独立した産業としては成り立ちにくい環境教育、クリーンエネルギー、林業、社会福祉などの分野においても、フィンランドでは市民と企業と国家や自治体が一体となって、経済的にも立派に成り立つシステムができています。市民オンブズマン（ひとことで言えば、公務員などの公共の仕事をチェックしている人）が力をもって、構造的に役所の無駄づかいができていくフィンランドでも必要などころにはどんどんカネをつぎ込みます。生活する人々が本当に必要なものには国も自治体も企業も個人もきちんと投資する姿勢が確立されているのです。これは結局そこで生活している人たちの問題意識の高さ、民度に帰するのだと思っています。私たち日本人にとっては自然は当然そこにあるべきもので、保全をしていかなくは、結局自分たちの未来に跳ね返ってくると考えている人はまだまだ少数派でしょう。公共心も希薄で、感覚的に所属が明確になっていないもの、たとえば国有地や府有地の山や海や川には利害関係のある人と、心から海や山や川を愛している人を除けば（一見チャラチャラしているように見えるサーファーたちの環境への意識の高さは見習うべき点がとても多いと思います）、他人事のように無関心で、お上任せが当然だと考えている人がほとんどです。そのくせ個人所有の山などは放ったらかしにされているものであっても、迷って少し足を踏み入れただけでも大騒ぎになります。（フィンランドでは個人所有地であっても、森は公共のものだという考え方があり、生活領域を侵すものでない限り、他人が個人所有の森でブルーベリーやキノコを採るのは自由です。）そういう公共のための義務は果たさないけれども、自分の権利だけは主張するというエゴイズムがある限り、環境教育などは物好きなボランティアが勝手にやっていたらいいという考えが消え去らないのだと思います。

私は最近、環境教育の本来の目的は何なのかを考察した場合、無償ボランティアでの活動には限界性を感じてきています。本当に美しい自然環境を保全しようとするならば、やはりその活動を生活の糧にしていくプロがいなくてはならないし、またそれを社会全体で支えていくシステムが構築されなくてはならない。フィンランドではボランティアでも社会的にコンセンサスを得ているものは有償です。高い税金と引きかえに社

社会保障制度の充実したこの国らしいのですが、一貫した活動をするには生活の保障は欠かせないという考え
方です。もちろん無償のボランティアも大きな役割を果たしていますが、それはあくまで補完勢力です。そ
うでなければ、しまいには年金をがっぽりもらっている年寄りだけにしか、長続きする活動は出来なくなっ
てしまい、本来は同じ語源であるはずの環境活動（エコロジー）と経済活動（エコノミー）が分離してしま
い、観念的な活動しかできなくなってしまいます。今日本では就職難で、仕事にアイデンティティーを求め
ることができず、生きがいボランティアに求める若者も多くなっていますが、いつまでもパラサイトを続
けるわけにもいかなはずです。そして今のままでは、少子高齢化が止まらないこの国では、いつか年金財
政の破綻とともに、今は活発に行なわれているシニア世代の自然環境保全の活動などもふっとんでしまうに
違いありません。国や地方自治体や企業ばかりが変革を求められています、ボランティア団体も自己満足
のあぐらをかいているのではなく、自分の力で変わらなくてはならない時期が来ていると、私は思ってい
ます。

最近本当に日本という国は元気がありません。お国のエライ人が都合のいいデータだけをもちだして、「よ
くなってきている」と主張しても、それは上の数パーセントにいる人だけが全体を引き上げているだけで、
一般庶民には説得力ゼロです。中高年は口先だけは格好のいい評論家でも、実は既得権益にしがみついてば
かりの保身一辺倒のイエスマンばかりになり、老人は相変わらず公共心がなく、時代が本当に求めているも
のや未来への危機感に対する意識はありません。また若者の傍若無人ぶり、自分たちだけのカラに閉じこも
る習性はどうにもならないくらいです。日本人全体が責任をとることに臆病になり、引きこもってしまって、
保身に汲々とし、「自分さえよければいい教」や「結果さえよければ何をやってもいい教」という宗教に支配
されつくされたかのようにマスコミなどでは伝えていきます。

でも決して日本人全体がそういうふうになってしまったわけでは決してありません。私もパークレンジャ
ー活動をはじめとするさまざまな自然体験活動で、この数年素晴らしい若者たちとの多くの出会いをしてき
ました。本気で何かを変えようとしている若者、本気で自分からアクションを起こそうとしている若者。若
者だけではなく、未来の日本に本気で危機感を感じ、アクションを起こしている中高年たち。もちろ
んその中には女性もたくさん含まれています。ただそこにはひとつのキーワードがあると思います。「個人」
というキーワード。日本の伝統的な強さはカイシャやヤクショを始めとする組織力でした。でも今は違いま
す。旧来から存在する組織が形骸化し、組織は守旧派の保身のための道具に利用され、むしばまれ、個人と
して力量をもった人にはむしろ妨げになる要素を多くはらんでいる様相があります。ニートやフリーター
の問題は、本人の問題よりも、改革、改革と言いながら、現実はいまだに責任を取るべき人が責任を取らない
旧来型の組織がこの国の主流を占めていることが遠因になっていると私は思っています。それよりもひとり
ひとりの力が目の見えるところにつながってできた個人レベルでのネットワークがどれほど未来への展望を
示すことができるか！日本人として、人間としての誇りを取り戻すためにも、私は原点に帰っての自然体
験活動を通して「本当に大切なものは何なのか」ということを共に考えること、そして何かと難しい現実社
会での日常生活に於いても、ここで得たことが生きてくるような活動を考えることをテーマに今年1年過ご
していきたいと思います。パークレンジャーという活動が大阪府の庇護の下にある、一グループから発展し
て、ゼニのとれる独立心旺盛な本気の集団になった時（このゼニが取れるというのは文字通りの金儲けがで
きるという意味ではなく、独立して運営できるという意味です。念のため）、経済と環境が両立した未来へつ
ながるボランティア団体として、なくてはならない存在になっているはずで。

年齢や性別は関係ない。経験や技術や知識の有無も関係ありません。まずは、自分が！自分が考える。自分が動く。自分の信念で動く。ひとりでも動く。できれば自分が直接仲間を引きずり込む。異質の人も排除するのではなく、個性をうまく活かして、中へ取り込む。そして組織にぶらさがる人のいないみんなで動けるチームを作ってゆく。みんなが自分のできること、果たせる役割がないかを考えてみる。私がパークレンジャーとしての任命を受けてからの4年間、かつては人が集まらず、活動は活気を失い、会議をやっても声の大きい人が自分の考えを放言するだけで、会議からは何ら得るものはなく、そんないつ消えてなくなってもおかしくないような状況にあったパークレンジャーという組織が変革してきたのは、ひとりひとりのパークレンジャーやひとりひとりの公社関係者やコーディネーターの個人の強い思いがそのまま組織の思いにリンクされてきたからだと思っています。Believe myself! Believe ourselves! まだまだ成長過程、ボランティアとしての完成型には程遠いですが、声の大きい特定の人物の考え方だけが反映されるグループから、みんなで支えあって、みんなで協力して作ってきたチームへと変わってきたし、この4年間で進んできたベクトルの方向性は間違えていないと信じています。そして、いま、パークレンジャーの活動からは「本当に大切なものが何なのかオーラ」がチラチラとではありますが放たれてきているような気がしています。

先日行なわれたトリノオリンピックで最も日本人の心を動かしした競技は、金メダルを取った女子フィギュアスケートを別格とすると、女子カーリングだったそうです。大会前は、漬物石を箒で掃いて転がすヘンな競技、という評価でしかなかったのが、終わってみたら、日本中が大ブームになっていたのです。青森で開催された日本選手権にはマスコミと観衆が溢れかえり、実話をベースにしたカーリング映画の「シムソンズ」は関西では4つの映画館しか上映されていませんが、どこも大変に賑わっているそうです。私たちに手の届かない別世界に住んでいるような他の競技の人たちと違って、活動資金もあまりなさそうなのに、ひたむきで明るくて前向きで楽しんでいて説教くささがまるでなくて、古い体育会的な雰囲気を感じられない、それでいて真剣なプレイで元気のないこの国を活性化させた彼女たちには、結果よりもプロセスに価値がある、プロセスを大事にすることで結果はついてくるという未来へつながるチームのカタチの方向性を見るような思いがしました。

肩肘張らなくても、そのままの自分のままでも、本気でやれば、きっと何かが変わる。きっと変えることができる。かしこばらなくても、そのままの自分のままでも、本気でやれば、きっと守ることができる。きっと変わらないでいられる。私たちが今関わっている「自然」はいつの時代も、どんな国や地域でも、その現実社会へ向けて、時に辛辣に、時に優しく、時にはダイレクトに、そして時には皮肉っぽく、メッセージを投げかけています。新しくパークレンジャーになられた人たちとともに、その自然が投げかけてくるメッセージを、インタープリターとして受けとめ、もっともっと社会へ向けて楽しくも真剣に問題提議をしていけるパークレンジャー活動を行なっていけたら嬉しいなと願っています。

追記：WBCで日本野球が世界一。王監督とイチロー選手たちの魂を込めたプレイ、心に響く熱いコメントに久々に興奮しました！そこに野球という独特のチームスポーツの素晴らしさ、面白さ、奥深さを改めて実感するとともに、日本選手団に究極の理想のチームスタイルを見たような思いがしました。ワールドカップでもスタイリッシュなサッカーではなく、4年前にロイ・キーンが率いたアイルランドチームのようなチャレンジャーとして鬼気迫るようなひたむきな戦い、そしてできれば中田選手のひとつ皮むけた熱いコメントを期待したいなあ。

屋久島の森

p r 1 2 期 椋田 房子

私は自然で英気をもらっては 人間社会に戻る。自然が栄養源である。

ある時、ガマさんの案内で屋久島へ行く機会があった。もう1人ゴジさんも一緒に。3世代で屋久島勉強の旅だ。

千尋の滝、平内の海中温泉、フルーツガーデン、中間のガジュマル、大川の滝、西武林道、海がめ館、灯台、楠川温泉等々
いろいろレンタカーでまわってもらったが、もののけの森（白谷雲水峡）が一番印象深かった。

晴れているのに太陽が顔を出す事のない原生林、照葉樹林とやく杉の混合林で、日焼けしないし暑くない。沢沿いにゆっくりゆっくり風を感じながらの山歩きは快適だった。

途中出逢ったヤクザル、ヤクシカの可愛い目に感動した。物怖じしないゆったりした仕草なのでゆっくり観察できた。食べ物が豊富だから、笑面のサルがガツガツしている様子を見たあとだから、余計そう感じたのだろう。少し小ぶりなのは、昨夜、YNACのスクリーン勉強会で学んだ通りだ。暖かい所の生きものは小さいのだ。

シダやコケ類が多くてルーペ持って行って良かった。可愛いコスギゴケや木々の葉の裏表やモミの木先の先きっぱ、花のヒメツルムシドウシ、ザトウ虫等々 ルーペの世界は不思議がいっぱい。感激だ。又ニコケに水をやる女の子の優しさを感じ、太閤岩で「ずーっと、ここに居ていたい」と言う若者の言葉には驚いた。大きい花崗岩の下は目もくらむ谷底なのに、あたり一面は山々が連なる大パノラマだが、私はほふく後退するのが精一杯だった。

辻峠で横になった。大地の息吹が聞こえるかな？山から滴り落ちる水音が聞こえるかな？なんて体裁つけて、念願のゴロ寝。
手持ちの飲み物がなくなっても 清流や湧き水が飲めるので、安心。こんな事はめったにできない。本州の山では考えられない事だ。

帰り道、枯れた木株からもの見事な大木が まっすぐ空に向かってる。30mぐらいのある高さだ。首が痛くなる。又ヒメシャラの赤の木肌はあたり一面の緑の中で目を引く。樹皮が無いのに水分がいっぱいで硬い重たい木だそう。歩を進めるとひとつの木から7つの種類の木が伸びて共生している。力強い生命力を感じる。何百・何千年も雨風に耐えながら 不服も言わず種の保

存の為、生き続けている。登りの往路でも観察したが、復路でじっくり観察できてよかった。汗一杯の顔に大気の風は幸せを感じる。この風が今までの疲れを吹き飛ばしてくれる。

これで みどり公社パークレンジャー3人の『和・喜・愛・逢、屋久島の旅行記』終わりです。皆さんも一度一緒しましょう。ガマさんのDNAを受け継いだ私がガイドウォークをさせていただきます。あと2~3度行ってからですけど・・・最後にノーギャラで添乗員、ガイドウォークしてくれたガマさんに感謝・感謝。



樹木物語

市民の森パークレンジャー
大塚園芸とどろ公園

9期 高川雅夫

その7 檜(ひのき)

ヒキ、ヒキ科、高さ40m、径2m以上の常緑高木。
樹皮は、紅褐色、縦(皮)に裂け、薄皮で剥がれ落ちる。
葉は、小鱗片状、小枝に密着する。葉の裏は白くY字に
見える気孔線がある。

ヒキ科の分布、日本と環太平洋地域に限られている。
ヒキは日本のみならず、日本中部以南から屋久島まで
日本第二の人工林樹種で、また林業地は、尾鷲、吉野、
天竜川流域など。

我々の世界に知られたのは、同じ仲間台湾ヒキ
(台檜)、アメリカのヒキ(米檜)も材質がよく、日本に輸入
されている。

材の強度、耐久性は特に優れていて、そのうえ繊維
(繊維)で、先鋭(さび)があり、材の耐久性は、
内装材として優れている。

法隆寺五重塔の芯柱は、創建時樹齢1200年のヒキ
が用いられており、今でも、使用されている。

名前の由来は、檜の字が当り出ているが、元来は「火の木」
とあり、その名を火を飛ぶ石に由来する。

樹木創造の神様であるスサノノミコトの胸毛から檜を
つくられ、その致を宮殿や神殿の用材に選ばれた。

終戦後、拡大造林は、スギ、ヒキ、カマツ、巨杉に。
造林地の手入れ(断伐、刈込)が悪く、スギ花筋、ヒキ花筋と
なり、春の花筋症と社会問題となっている。

- 木曾五木 (ヒキ、サワ、アスヒ、コウヤマキ、ネズコ)
- 高野六木 (スギ、ヒキ、コウヤマキ、アカマツ、ウカ)
- 丹波六木 (モミ、ウカ、カヤ、スギ、ク、ヤキ)

その8 論語の四時(四季:春・夏・秋・冬)

論語の四時(四季)の火を説き及ぶ。

「春には 榆(いん)と柳(やなぎ)から火は起り、夏には 葵(あひま)と杏(あんず) 季夏(土用)には 桑(くわ)と柘(やなぎ) 秋には 柞(しほ)と檉(しげ) 冬には 槐(えんじ)と檀(たん)から火は起る。此が四季の循環の象徴にや。

榆・柳の色は青。春はこれ木。木の色は青。中に春は榆・柳を用いる。

同様に 葵・杏の色は赤。夏はこれ火。火の色は赤。中に夏は葵・杏を用いる。

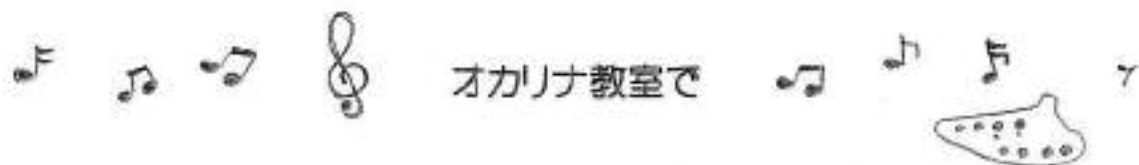
桑・柘の色は黄。季夏は土。土の色は黄。中に季夏は桑・柘を用いる。

柞・檉の色は白。秋はこれ金。金の色は白。中に秋は柞・檉を用いる。

槐・檀の色は黒。冬はこれ水。水の色は黒。中に冬は槐・檀を用いる。

2) 下は、四季の火を少観察し、崇高な天の管仲に似て、廣く、その向、いつか、これは天象の観測に明かすこと... (夏「陳」の始め、新伝社)

(木種)	(四季)	(五行)	(五色)	(方位)
榆(いん) 柳(やなぎ)	春	木	青	東
葵(あひま) 杏(あんず)	夏	火	赤	南
桑(くわ) 柘(やなぎ)	季夏(土用)	土	黄	中央
柞(しほ) 檉(しげ)	秋	金	白	西
槐(えんじ) 檀(たん)	冬	水	黒	北



オカリナ教室で

西出 こんちゃん (むろいけ班)

昨年5月より月2回、オカリナの教室に通っています。作成する方ではなく、演奏する方です。12、3人が様々な大きさのオカリナでハーモニーを作り出しています。様々な、というのはオカリナは大きさによっていろんな音階を持っているからです。曲を合奏するときには八長調の音階を持つ5Cと12C、ハ長調の2Fと10Fと呼ばれる大きさのものを主に使っています。一般によくみられる大きさでハ長調のドレミから始まる音を出すものが5Cです。数字が大きいものほど楽器本体も大きく、低い音をだすものになっています。私は持っていませんが12Cなんて大きいものは重くなるし息もたくさん吹き込まなければならないので演奏するのも大変そうです。

オカリナは粘土を焼いて作られた管楽器なのでひとつひとつ固有の癖のある音に仕上がっているものがほとんどです。それぞれの管の吹き癖？を知った上で周りの音と合わせていくのです。曲の担当パートにもよりますが、教室ではなるべく自分で作った5Cの管を使うようにしています。森の工作館のオカリナ作成の教室で初めて作ったものですが、形も指穴の位置も良くて一番のお気に入りです。それに有名なオカリナメーカーの楽器の中で演奏しても恥じない、しっかりした音程を持っていて驚きます。(チューニングは先生がして下さったんですけど。)自分で手がけて作ったもので他の音とも合わせられるというのはなんともいい気分です。

教室に習いに行くまでは、楽譜をたどって音を出す、とりあえず曲を完成させるというくらいしかできませんでしたが、今では正しい音で周りと調和させながら演奏する、ということに意識を持つようになりました。また先生がとても耳のいい人で音程の狂いにうるさいので(いい意味で)、こちらも自然と微妙な音のずれなどが気になるようになりました。今では自分で楽しむにしても誰かに聞いてもらうことを前提として演奏するにしても、適当に曲に聞こえたらいい、というのでなく、より美しく、聞いていて楽しいものであるように努力をしたいと思っています。

何かを作り出すときにはまず努力してやってみること、そしてよりいいものに仕上げていく気持ちをもつこと。演奏も、作品も同じなんだなあと思います。

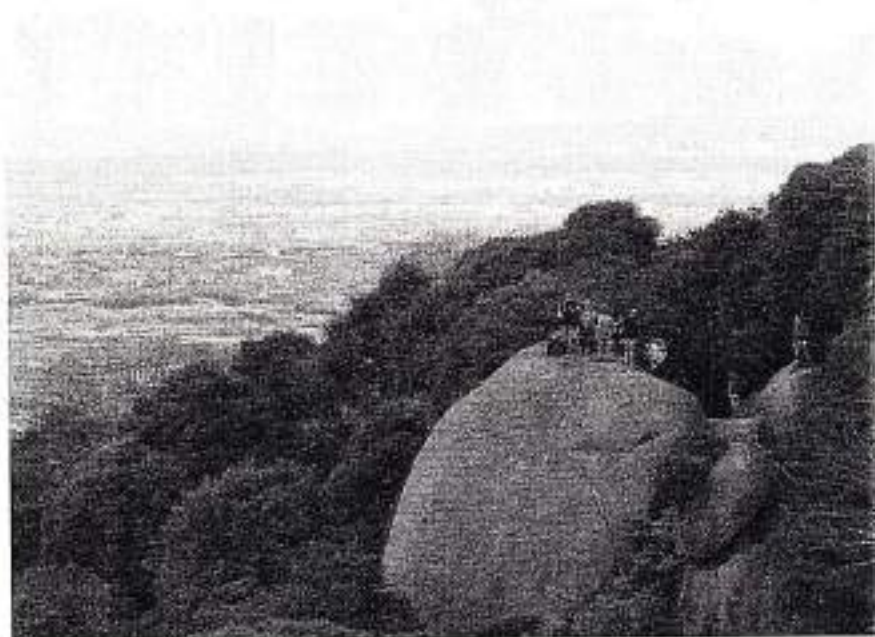
え？演奏は聞いたが美しいものとはいえない？いや、努力はしてるのよって…



C0 日下が(勝手に)選んだベストショット! 平成17年度下半期版!!

いつものことながら苦情等は一切受け付けません!

第1位 くろんと園地「くろんと冒険ハイキング」より



パノラマ写真だともっと良い写真になったと思います。後ろの展望が分かりますか?

第2位 ヒダサンショウウオの卵



青白い寒天状の卵のうの中に薄黄色の卵が入っているのですが、白黒だと分かん!
でもカラーだとすごく綺麗なんです。ちなみにサンショウウオの幼生の多くは共食いをします。

第3位 飛び立つシジュウカラ



巣箱から飛び出したシジュウカラです。現在撮作中! 真っ最中!

編集後記



Tanpopo.

◎ IPWSもこの33号と
なりました。年間の発行数は
少なくても、あと楽しみに
待つていってほしいRかいほお!!と
思っています。また次号も
みなさんのいろんなお話まかせて下されね。
には、こちん ♪

IPWSは日頃の活動では
表れない。メンバー個人の
「思」が表現されていって面白い
ですよね。いつか懐りの電車
でニヤニヤしながら読んで
います。 日下

◎ みなさんの思い、活動での楽しさ、
IPWSを読むのは、楽しいです。
多くの仲間がふえ、うれしいです。
ホッス。

2006年3月25日発行